これからの道徳科の授業と「道徳ノート」の活用

帝京大学教育学部初等教育学科
准教授 **飯島　英世**

本資料は、「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

1. これからの道徳科の授業

平成 30 年度から，いよいよ小学校における「特別の教科　道徳（道徳科）」の全面実施が始まります。新たな道徳科の授業は，採択された初めての検定教科書を使う学習が展開されていきます。

実施にあたっては，「読み物道徳」と言われたり，他の教科に比べて軽視される傾向にあったりすることなど，これまで指摘された「道徳の時間」についての多くの課題を解決しながら，子どもの道徳性を育てるために，より効果的な指導へと道徳授業の質的転換をすることが求められています。

特に，子ども一人一人が，ねらいとする道徳的価値にしっかり向き合って，「考える道徳」「議論する道徳」を進めることが極めて大切です。

改訂された小学校学習指導要領では，道徳科の目標は，「道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」と示されています。

この目標は，言い換えると，これからの道徳科の授業は，「子どもが，ねらいとする道徳的価値について，教材の特定の場面で考えたり話し合ったりすることを通して，ねらいとする道徳的価値について，その大切さや実践することの難しさなど，様々な角度から考え，理解し，自分を見つめ，生き方についての考えを深めることができる学習になっていなければならない」ということになります。

つまり，道徳科の授業が，子どもたち一人一人にとって，ねらいとする道徳的価値としっかり向き合いながら考え合うことができる授業であること，そして，そのことを踏まえて自分の生き方についての考えを深める授業であることが求められるのです。

(1) ねらいの明確化

このような道徳科の授業を進めるために最も大切なことは，授業の「ねらい」を明確にすることです。

ねらいとする道徳的価値について，どのようなことの気付きや理解を基に，子ども自身が自分を見つめ，生き方についての考えを深める授業にしたいのか，そして，道徳的諸様相である道徳的判断力，心情，実践意欲と態度のどれを育てようとするのかを，明確にした「ねらい」をもつということです。

例えば，低学年の「親切，思いやり」の授業では，ねらいを「身近にいる人に親切にしようとする心情を育てる」だけではなく，授業で使用する教材の特質から，ねらいとする価値に関わるどのようなことの気付きや理解をすることによって，親切にしようとする心情を育てたいのかを明確にするということです。そこで，次のように設定することが大切です。

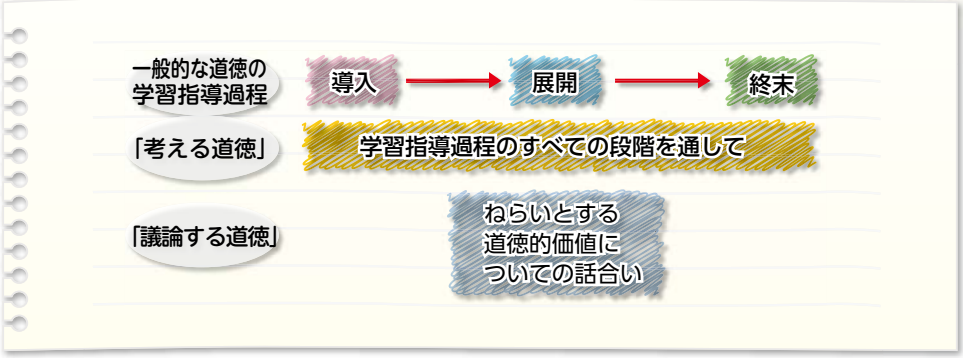
【ねらいの例】親切な行いは，自分も相手も温かな気持ちになることを理解し，身近にいる人に親切にしようとする心情を育てる。

このように「ねらい」を明確にすることにより，中心的な教材（以下，「教材」という）を通して考えるための発問構成にも繋がることになります。特に，中心発問の設定では，親切な行いは，自分も相手も温かな気持ちになる，ということに気付いたり理解したりすることについての思いや考えを深めることができる場面に置く，ということになるでしょう。

そして，教材の特質と「ねらい」とを端的に表現する「主題名」も工夫することが大切です。

これらのことについて明確にするということは，道徳科の授業の「ねらいとする道徳的価値をどう捉えるか」，児童の実態から「この授業で何を育てたいのか」，そのために「教材をどのように活用するのか」ということにもなります。

つまり「明確な指導観」をもつことが大切なのです。



図①「考える道徳」と「議論する道徳」

⑵「考える道徳」「議論する道徳」

さて，ねらいが明確になると，次に求められるのは，ねらいとする道徳的価値について，子どもたちにどのように考えさせ，自分の生き方についての考えを深めさせるか，という道徳科の指導方法の質を高めるということです。

そのキーワードが「考える道徳」「議論する道徳」です。この「考える道徳」「議論する道徳」で大切なことは，ねらいとする道徳的価値について，「話し合い，考え合い，深め合う」ということです。

特に「議論する道徳」という言葉から，ディベートのようなことを考えがちになりますが，道徳科の授業で大切なことは，「ねらいとする道徳的価値について，子どもたちが授業を通じて自分なりに生き方についての答え（思い）をもつ（深める）」ということであり，子ども一人一人が道徳的価値に関わる自分の思いや考えを伝え合い，話し合って，多面的・多角的に考え，自己理解を深める学習活動の指導法を意味すると捉えることができます。

一般的に道徳の学習指導過程は，「導入」，「展開」，「終末」で構成されますが，「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」には，「展開は，ねらいを達成するための中心となる段階であり，中心的な教材によって，児童一人一人が，ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる段階であると言われる。」と示されています。

つまり，「考える道徳」については，学習指導過程のすべての段階を通して言えることですが，「議論する道徳」では，主に「展開」の段階で，ねらいとする道徳的価値についての話合いで進められることになります（上図①）。

そして，これらの学習を進めるための一つの指導方法として「問題解決的な学習」や「道徳的行為に関する体験的な学習」があります。

道徳的価値について，子どもたちが自分のこととして捉え考えること（自我関与）をもとに，これらを含めた多様な指導方法を授業のねらいや発達の段階に応じて適切に取り入れることで，「考える道徳」「議論する道徳」を進め，道徳授業の質を一層高めることが大切です。

また，「考える道徳」「議論する道徳」を進めるためには，その前提として，ねらいとする道徳的価値に関わる様々な思いをもつことができるような「教材提示」の工夫や「発問」，「話合い」，そして「書く活動」などの指導方法の工夫は，極めて大切です。

⑶ 道徳科の評価

道徳科の完全実施に伴い，もう一つ大切なこととして「道徳科の評価」があります。

これまでも，道徳の時間の評価については，平成20年の学習指導要領解説に示されていたように，学校生活全体での教師と子どもの心の触れ合いを通して，共感的に評価することを前提に，観察や会話による方法，作文やノートに書かれたことにより評価する方法，あるいは質問紙や面接等による方法など，様々な方法で行われてきました。

そして，全教育活動を通して行う道徳教育との関わりを含めて，指導要録の「行動の記録」や「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に書くことはあっても，すべての子どもに「道徳の時間の評価」として記述することは殆どありませんでした。

けれども，平成28年7月に示された「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の『「特別の教科　道徳」の指導方法・評価等について（報告）』によると，「道徳科については，指導要録上，一人一人の児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子について，特に顕著と認められる具体的な状況を記述する」ことに改善されます。

このことを受けて，学校から発行する通信簿（通知表）に，道徳科の評価を記述する形で加える学校もかなりあるようです。

・評価とは，子どもの側から見れば，自分の成長を実感して意欲の向上につなげていくものであり，教師の側にとっては，指導計画や指導方法の改善・充実につながる資料になるものである。
・道徳科の評価においても，指導の効果を上げるため，学習状況や指導を通じて表れる子どもの道徳性に係る成長の様子を，指導のねらいや内容に即して把握する必要がある。
・道徳科の評価は，子ども一人一人の道徳性に係る成長を促すとともに，学校における指導の改善を図ることを目的としており，他者と比較するためのものではない。

図②評価の基本的な考え方

「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の「評価の基本的な考え方」の要点をまとめると，上図②の内容になります。

そして，「道徳科の評価の在り方」には，

・道徳科で育むべき資質・能力の三つの柱（「知識・技能」:道徳的価値の理解,「思考力・判断力・表現力」:物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める，「学びに向かう力，人間性」:自己を見つめ,自己の生き方についての考えを深める）や道徳的判断力，心情，実践意欲と態度のそれぞれについて分節し，観点別評価を通じて見取ろうとすることは，道徳科の評価としては妥当ではない。
・個々の内容項目ごとでなく，大くくりなまとまりを踏まえた評価をする。
・他の子どもとの比較による評価ではなく，成長を積極的に受け止め，認め，励ます個人内評価として記述式で行う。
・特に，学習活動で子どもが多面的・多角的な見方へと発展しているか，道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかを重視する。

などが挙げられています。

さらに，評価について次の二つの点が示されています。

①他者の考え方や議論に触れ,自律的に思考する中で,一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか。
②多面的・多角的な思考の中で，道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。

つまり，これからの道徳科の評価は，子どもの学習状況や道徳性を観点別に評価するのではなく，個人内評価として，主に上記の二つの点に注目して行うことになります。

そのためには，道徳科の授業で，子どもの学習状況や道徳性に係る成長の様子を，発言や感想文，質問紙の記述などから見取る，あるいは書いたり発表したりすることが苦手な子どもについては，人の意見を聴きながら考えようとしている姿勢や表情などから見取り，肯定的に評価することが大切です。

2.「道徳ノート」の活用

これまで，述べてきた道徳科の授業の在り方や指導方法，評価等において，書く活動はとても重要な役割をもっています。

それは，「考える道徳」「議論する道徳」を進めるにあたって，子どもたちがねらいとする道徳的価値としっかり向き合ったり，教師が子ども一人一人の学習状況を把握したり，家庭との連携を強くしたりする媒体とすることができるからです。

ここからは，教科書別冊としての「道徳ノート」について，編集の意図や構成，そして道徳科の授業での活用など，具体的な活用の仕方について紹介します。

(1)「道徳ノート」編集の意図

日本文教出版の「道徳ノート」は，次のような考えをもとに編集されています。

〇子どもにとって
・自分の考えや，友達の考えを書き込むことで，多面的・多角的な見方や考え方に気付く。
・自分自身の成長の記録となり，手元に残る。
・「考えて書く」実践の積み重ねが言語活動の充実につながる。

〇教師にとって
・道徳科の授業での子どもの道徳性の成長の様子や学習状況を継続的に把握することができ，子どもを理解する手立てとなり，指導や評価に役立つ。
・別冊にしているため，子どもたちが「道徳ノート」を教師に提出しやすく，教師にとっては，書かれた内容の確認や返却が簡単になる。

〇保護者にとって
・保護者記入欄を活用することで，家庭と学校とが協力して子どもの道徳性を育てることに役立つ。

【子どもの立場から】	【教師の立場から】
・発言が苦手でも，自分の感じたことや考えたことを自由に表現できる。 ・じっくり考えて書くことで，ねらいとする道徳的価値について自分を見つめることができる。 ・いろいろな友達の意見も考え合わせながら，自分の考えをまとめることができる。 ・書いたことをもとに，自信をもって発表することにつながる。	・子ども一人一人の感じ方を把握できる。 ・一人一人が，ねらいとする道徳的価値についてどう考えているか，その状況を把握し評価につなげることができる。 ・道徳科の授業で把握した子どもの学習状況や道徳性に関わる実態を，教育活動全体で行う道徳教育の指導につなげられる。 ・教師自身の指導の評価に活用することができる。

図③道徳科における書く活動のさまざまな意義

⑵「道徳ノート」の構成

これまでの道徳の時間では，教師がワークシートを作成して使ったり，子どもが一冊のノートに感じたことや考えたことなどを書いたり，そのノートにワークシートを貼ったりして使うことも行われていました。

日本文教出版の「道徳ノート」は，教材に合わせて一冊の「道徳ノート」としてまとめています。

教科書の配列順に１教材あたり１ページを充てていますので，１回の授業でノート１ページという自然で無理のないペースで使うことができます。

また，教科書の発問に合わせて書くスペースをとっているため，授業中に子どもたちがどこに書いてよいのかわからなくなるという心配もありません。教師が授業後に「道徳ノート」を確認する際も，どこに何が書いてあるかがわかりやすくなっています。

さらに，教科書では，内容項目の４つの視点

Ａ主として自分自身に関すること
Ｂ主として人との関わりに関すること
Ｃ主として集団や社会との関わりに関すること
Ｄ主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること

を色分けしているので，その教材がどの視点に当たるのかが，一目でわかります。それに合わせて「道徳ノート」も同様の色分けをしているため，子どもの状況や発達の段階に合わせ，学期ごとあるいは学年ごとの大くくりなまとまりで，視点別に見返すことができるように構成しています。

⑶ 道徳科の授業と書く活動

では，道徳科の授業での「道徳ノート」の活用の仕方を紹介します。

「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」には，「書く活動は，児童が自ら考えを深めたり，整理したりする機会として，重要な役割をもつ。この活動は必要な時間を確保することで，児童が自分自身とじっくり向き合うことができる。また，学習の個別化を図り，児童の感じ方や考え方を捉え，個別指導を行う機会にもなる。さらに，一冊のノートなどを活用することによって，児童の学習を継続的に深めていくことができ，児童の成長の記録として活用したり，評価に活かしたりすることもできる。」と示されています。このように，道徳科における書く活動には，さまざまな意義があります。書く活動の，子どもと教師，それぞれの立場での意義は上図③のようにまとめることができるでしょう。

これからの道徳科の授業では，これらの意義を踏まえて，子どもたちの発達の段階や実態に応じて，適切に「道徳ノート」を活用した「書く活動」を取り入れることが大切です。

⑷ どこで書くか，何を書くか

前述のように道徳科において，書く活動はとても意義のある学習活動ですが，毎時間書く活動を入れなければならない，ということではありません。

教師が１時間の授業を計画する段階で，子どもたちの道徳性を養うために書く活動を取り入れることが効果的であると判断したときに行うことが大切です。

したがって，別冊「道徳ノート」もすべての授業で使わなければならないというものではありません。

では，授業で書く活動を学習指導過程のどの段階で取り入れたらよいのでしょう。そして，子どもたちに，どんなことを書かせればよいのでしょう。

書く活動は，週１時間の道徳科の授業の中で行うとても貴重な時間ですから，教師は，何を目的に書く活動を入れるのか，子どもに何を書かせるのかを明確にする必要があります。

道徳科の学習指導過程では，「導入」，「展開」，「終末」のどの段階でも，書く活動を取り入れることは考えられます。

けれども，例えば学習指導過程の終末の段階で，子どもたちに「今日の道徳の学習について，感想を書きましょう。」と投げかけ，授業の感想を書かせたとき，

①1時間の授業を計画する段階で，子どもたちの道徳性を養うために書く活動を取り入れることが効果的であると判断したときに書かせる。
②すべての授業で使わなければならないというものではない。
③一時間の道徳授業で，書く活動に取り組ませるのは，基本的には1回と考えることが望ましい。
④一番時間を使って深く考える「中心発問」に関わって書かせる。
⑤道徳的価値に関わって，自分自身の生き方について考えを深める段階で書かせる。

図④「道徳ノート」活用のポイント

「今日は，はじめに先生がお話を読んでくれて，みんなで話し合って，最後に先生が子どもの頃のお話をしてくれた。」という授業の説明のようなことを書いてきたらどうでしょう。

これでは，道徳科の授業に楽しく参加したということは推測できるにしても，授業のねらいとの関わりで子どもの思いや考えを捉えることはできません。

したがって，書く活動によって，子ども一人一人が，ねらいとする道徳的価値とどのようにじっくり向かい合うことができるか，ということを考えて取り入れることが必要になります。

また，これまでの道徳の時間の授業では，次のような授業も散見されました。

例えば，導入で，ねらいとする道徳的価値に関わって，これまでの生活経験を思い出して書き，その他に読み物教材の場面ごとに登場人物の心情や考えを書く，そして最後に授業の感想を書くようになっているといったワークシートを使う授業です。

このように１時間の授業の中で，書く活動が何回もあったり，ワークシートでたくさん書く分量を求められたりする道徳の授業を進めてしまえば，書くことへの拒否感をもってしまうことでしょう。

ましてや毎回の授業が，何回もたくさん書かなければならない授業であったとしたら，子どもたちにとって，もはや苦痛にも近い，「道徳嫌い」の意識を育ててしまうことにもなりかねません。

したがって，１時間の道徳授業で，書く活動に取り組ませるのは，基本的には１回と考えることが望ましいでしょう。あるいは，どうしてもという場合でも，多くて３回が限度であろうと考えられます。それくらい書く活動は丁寧に時間をかけて扱いたいものです。「道徳ノート」は，書く活動を最大限取り入れた授業に対応できるように編集しています。

そこで，大切にしたいのは，「授業のどこで，何を書くのか」ということです。

それには，書く活動をより効果的に進めるために，主に次の二つのことが考えられます。

①登場人物の行為などを自分事として捉え，道徳的価値に照らして，その時の思いや考えを書かせる。
②教材でねらいとする道徳的価値について，話し合い，考え合い，考えを深め合った後の自分の生き方についての思いや願いについて書かせる。

①では，「展開」の教材を基に登場人物に託して，ねらいとする道徳的価値について深く考え自分を見つめる段階（「展開前段」とも言われる）で書く活動が考えられます。一番時間を使って深く考える「中心発問」に関わって書かせるということです（図⑥の①）。

②では，教材を通して自分事として深く考えた後，道徳的価値に関わって，自分自身の生き方について考えを深める段階（「展開後段」とも言われ，過去，現在，未来など，自分の生き方を考える段階）での書く活動が考えられます（図⑥の③）。

どちらにしても，何を書いたらよいのかが子どもたちにわかるよう，明確で短い言葉で指示する（発問する）ことが大切ですし，書かせる分量は子どもたちの発達の段階や実態に合っていることも大切です。

また，ねらいとする道徳的価値について自分の考えを深めようとするとき，「話合い」や「考え合い」の中で友達の考えと比べながら，感じたり考えたりしたことを書くということも考えられます。友達の考えについて書く場合は，じっくり書く時間を設けず，「子どもが友達の意見を聞きながら考えたことを，主体的にメモしながら考える」という扱いもできます。

別冊「道徳ノート」は，教材を通して考える中心発問の場面と，教材で理解した道徳的価値に関わって自分自身の生き方についての考えを深める場面の二つに書く活動を取り入れることに加え，友達の考えも書くことができるよう編集されています（図⑥の②）。

前述のようにじっくり考えるということを踏まえると，この三つを全て使わなければならないということ

①メモを取りながら友達の意見を聞き，考える，という扱いもできる。
②教科書とは別の発問を使いたい場合は，発問を黒板に明確に書いて，子どもに「道徳ノート」の発問を書き換えさせる。
③教師用指導書付属の道徳ノートのデータを加工する。
④自己評価欄を活用し，自己評価の積み重ねによって，子どもなりに自分の道徳性を深めるきっかけとする。

図⑤「道徳ノート」のさまざまな利用のしかた

ではありません。このことは，実際に「道徳ノート」を使う子どもたちや，家庭で「道徳ノート」を見る機会が増えるであろう保護者への周知をしっかりとしておくことも重要です。

ねらいや子どもたちの状況に応じて，年間を通じてこの三つをバランスよく活用することによって，道徳的価値の大切さについての理解（価値理解），理解はできても道徳的価値をなかなか実現することが難しい人間の弱さについての理解（人間理解），道徳的価値に関わる感じ方や考え方は一つではないことの理解（他者理解）を深めることができるようになっています。

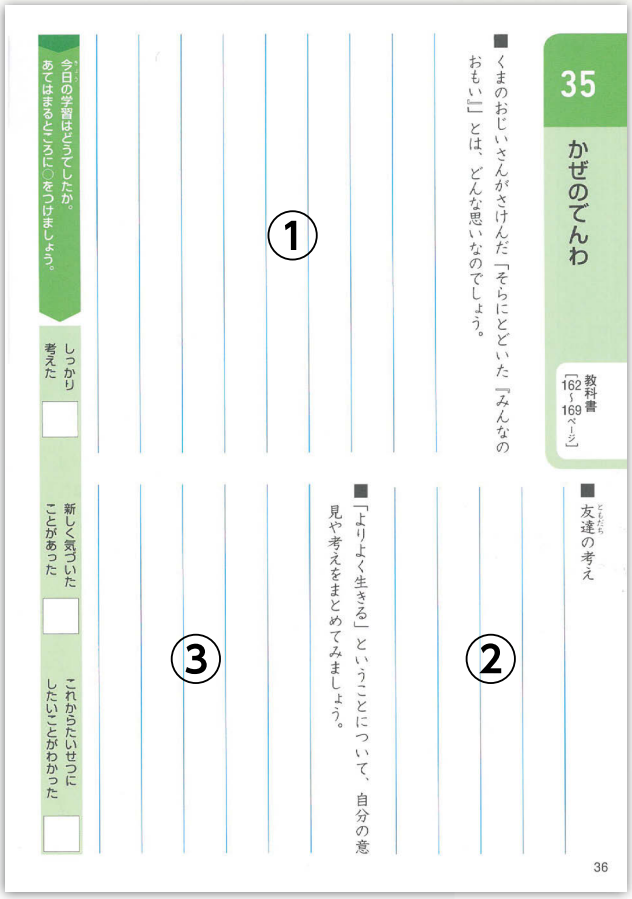
もちろん，教科書の発問とは別の場面を中心発問にしたり，さらに改善した発問にしたりする場合などは，発問を黒板に明確に書いて，子どもに「道徳ノート」の発問を書き換えるよう指示するなど，教師の意図で自由に活用することが可能です。教師用指導書に付属の CD-ROM には，「道徳ノート」の全データが，加工可能な形式で収録されていますので，加工して印刷・配布することもできます。

さらに，「道徳ノート」には，本時の学習を振り返り，簡単な自己評価をする欄も設けられています。

これは，学習を通じて深めた道徳的価値の理解と同時に自分を見つめ，自分自身についての理解（自己理解）を深めることとともに，これからの発展につなげることができる自己評価の欄になっています。

道徳の学習の中で，「しっかり考えた」「新しく気付いたことがあった」「これから大切にしたいことがわかった」について，当てはまるところに○をつけるという，ごく簡単な振り返りですが，このことの積み重ねが，子どもなりに自分の道徳性を深めるきっかけになることでしょう。

この自己評価で大切なことは，子どもが何を目的に自己評価をするのかということについて，よく理解していることです。「『しっかり考えた』ところに毎回○をしておけば，先生に褒められる」というのでは，意



図⑥「道徳ノート」の紙面

味のない自己評価になってしまいます。

(5) 書いたことを生かす

書く活動については，抵抗感を持つ子どももいます。抵抗感を減らすためには，「何を書くか」を明確にすることや書く回数や分量を適切に取り入れることなどがありますが，最も大切なことは，子ども自身が書くことのよさを実感することができることです。

例えば，発言することが苦手な子どもでも，「道徳ノート」に書いたことの発表ならできることもあることでしょう。また，書いたことを少人数で見せ合ったり読み合ったりしながら交流することもできるでしょう。そのことで，書いたことを子ども同士が共有し書くことのよさの実感に繋げることができます。

また，教師にとっては，子どもの書く活動を観察することで，その後の道徳的価値についての考えを深める話合いに生かす記述を見付け，意図的に指名をすることができます。

この他にも次のことがあります。

① 評価への活用

別冊「道徳ノート」は，子どもの状況や発達の段階に合わせ，学期ごとや学年ごとの大くくりなまとまりで，視点別に見返すことができるようにしています。巻末には「道徳の学習で学んだことを書きましょう。」

というページ（図⑦）が置かれていて，教師の判断で学期ごとや学年ごとに書かせることもできます。

そのことにより，次のような子ども一人一人の変容や成長の状況を把握することができます。

・学年初めから学年末にかけての記述量
・道徳的価値についての理解の深まり
・友達の意見への興味や関心，把握の程度
・他教科の学習や生活とを関連付けた思考の深まり

など，「道徳ノート」を通して把握できることはたくさんあります。これらのことを通して

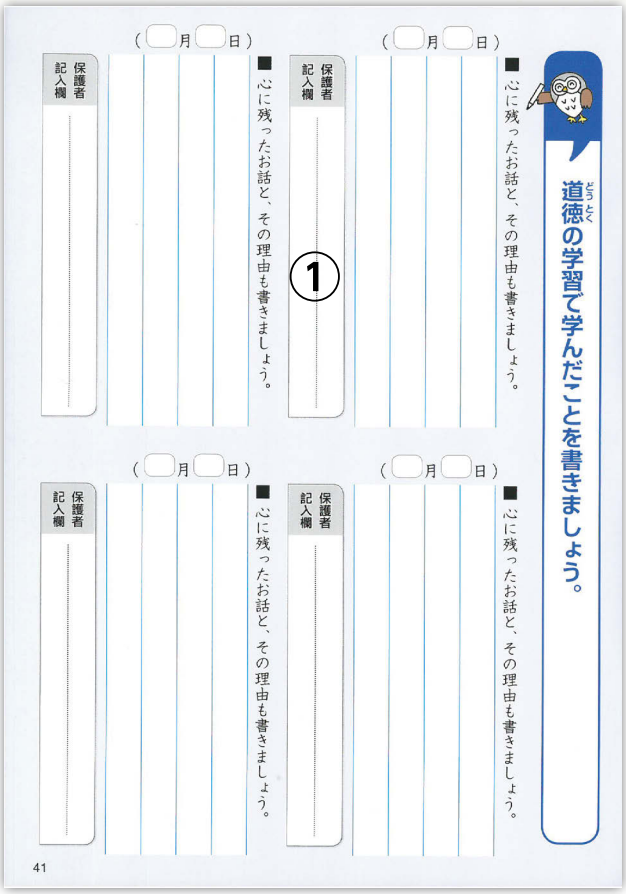
・子どもの成長を受け止め，認め，励ます個人内評価
・個々の内容項目ごとではない，大くくりなまとまりを踏まえた評価
・一年間という長い期間の中で変容を見取ること

など，子どもの自己評価も含めて，認め励ます評価へ繋げることができます。

② 家庭との連携と「道徳ノート」

子どもの道徳性の育成は，道徳科を要とした学校におけるすべての教育活動を通じて行われますが，言うまでもなく，それで完結することではなく，家庭との連携がとても重要です。

家庭の立場から考えると，学校の道徳授業を見たり，その内容を知ったりする機会はあまりなかったのではないかと思います。それは，授業参観の機会が少ないことや，副読本などの教材を子どもたちが家庭に持ち帰って，家族で学校の道徳授業を話題にする機会が少なかったということなのではないかと考えられます。



図⑦「道徳ノート」の巻末ページ

その点，教科書を使う道徳科では，家庭で保護者がその内容を目にする機会も増えることでしょう。

「道徳ノート」には，「保護者記入欄」（図⑦の①）が設けられています。必要に応じて，子どもが道徳の授業で学んだ心に残ったお話を書き，それを家庭に持ち帰って見せることによって，道徳授業の様子や道徳的価値について話題にする一助にすることができます。もちろん，必要に応じてとは，教師の側からだけではなく，家庭の側からの必要に応じて，という意味もあるので，自由に活用することができるとよいでしょう。

「道徳ノート」を適切に活用しながら，道徳科の充実を進めましょう。

これからの道徳科の授業と「道徳ノート」の活用

日文 教授用資料
平成29年(2017年)10月31日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD 33376

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690